『美德のよろめき』小考
-美德のイメージを中心に-

장 진 수*

Ⅰ. はじめに

『美德のよろめき』は三島由紀夫(以下、 三島と略稱する)[1]が 1956年(昭和31年)に『永すぎた春』という小說を發表してから、その次の年である1957年(昭和32年)に『美德のよろめき』を4月から6月まで「群像」に連載、6月に講談社から刊行された。この作品は1947年(昭和22年)に日本で姦通罪が廢止されてから10年後の、1957年(昭和32年) 春、發表されたが、ベストセラーにとなり、その當時の時代から見ると、社會的な規範を打破した大膽な小說であった。この作品が發表された後、日本社會では女性の自由思想が高まり、社會的に大きな影響を及ぼした。

三島の 『美德のよろめき』 の內容は主婦である女の主人公が家庭を持ち、不倫をした作品として爆發的なブームを起こした小說である。この作品が發表された當時「よろめき夫人」という流行語がつくられ、姦通した女を指稱した言葉として使われるほどであった。

この作品の創作動機ははっきり分からないが、三島が29歲になった時、19歲の赤坂の有名な料亭の女良と 知り合い、3年間付き合った後、別れることになる。この內容を松本徹氏は次のように書いている。

> この 『美德のよろめき』は、三島自身の戀愛が踏まえられていたようである。歌右衛門の家で紹介された赤坂の有名なさる料亭の女良で「華やいだ絹張りのとても美人で、お人形のような顏立ちで、不思議に亡妹美津子ちゃんに似」、三島が「眞劍に愛した」女性がモデルで、彼女とは昭和三二年五月、新派の公演 『金閣

---

* 한국해양대학교 국제대학 동아시아학과 교수
※ 韓國海洋大學校 敎授 (日文學 專攻)
※ 本稿は日本學報第43輯(韓國日本學會 1999. 12.)に發表された論文である.

1) 三島由記夫 (1925~1970)
日本の貴族の家門の出身で本名は平岡公威であり、東京大學の法學部を卒業した。彼は大藏省に勤めましたが、文學をつづけたい願いを捨てれず辭任して作家の道を歩いた。『潮騷』などたくさんんの作品を書き、『金閣寺』を發表した後有名になった。1970年度に戰前のように天皇信仰を繼承するような右翼思想を持って自衛隊の東部總監部に侵入して自衛隊員に演說した後、自殺した。

寺』を一緒に見たのを最後に、別れた。[2)]

この作品の中で三島自身の戀愛內容を背景にしたのではないかと書いている。又、「ロマンの世界」では越次倶子氏は次のように書いている。

虛構の青春を自らも得ようという試みではなかったか。その虛構の青春に三島自身、生きた、と言えないだろうか。[3)]

と作家自身の虛構的で、空想的な戀愛を小說中に挿入したのではないかという連想を推測している。この作品を分析するには、まず作品の中に現れた內容を作家はどんな考えを持って表そうとしているかを檢討することが重要であると思われる。それで、作家である三島はこの小說を通じて自分が眞面目に愛した女性のモデルをこの作品の中で女の主人公にして成し遂げられなかった戀愛感情をこの作品の中に挿入しようとしたのではないかと類推することかできる。

ところで、一般的に「女性の一生」の理想的なモデルは親の元で、貞淑な乙女として育ち、結婚して良妻賢母になるのが今までの美風良俗であった。しかし、この作品『美德のよろめき』では女の主人公が大事に育てられ結婚して、生活もとても豊かであった。しかし、彼女は親から受けついだ「官能的な美しい肉体」を盲目的な快樂のために性欲の對象に使用して社會秩序を崩していった。このようなことは社會と自分の家庭のためには大變恐ろしい社會問題であると言える。このように作家である三島は結婚した男女の結婚生活の中で起りうる社會上の問題を心理的な面を利用してこの小說の中で現わそうとした。また、この作品の中にかくされている道德觀念は女の主人公、自らが自分の悖德を自覺して道德的に正しく生きようとする意圖を强く表している。それで,　この作品の中で主人公の悖德をなぜ作家は「美德」に思ったのかを研究論旨にしたのであり、又、本稿では筆者はこの作品の中の「美德」が空想的な「美德」と道德的な「美德」として區別してこの作品の中でどのようなイメージで照らされているのかを分析して見ることを研究目的とした。

テキストでは『三島由紀夫全集』(全35卷, 補1卷, 新潮社刊, 1973)[4)]を使ってあり、作品の本文の引用はここに基づいてする。

---

2) 松本徹,『三島 由紀夫』, 河出書房新社, 1990. p. 115.
3) 越次倶子, 國文學(第21卷16号)「ロマンの世界」(『美德のよろめき』を めぐって) p. 79.
4) 三島由紀夫,『三島由紀夫 全集 第10卷』1973, (以下テキストの 引用文はページだけ表記する)

Ⅱ. イメージ提起

『美德のよろめき』は第20節からなっている小說として作品の理解のために『美德のよろめき』のストーリーを　簡單にみてみることにする。事業に多忙だった、倉越一郎の婦人である節子は28歲で、菊夫という幼稚園にかよっている男の子がいる人妻である。彼女は、非常にしつけのきびしい家柄の良い家に育ったインテリ女性であった。彼女は、結婚前に一度キスをしたことがある土屋という青年と浮氣をする。彼女は、夫の子を一度と土屋の子を二度姙娠したが、搔爬手術してしまった。搔爬手術後、死を思う苦痛ともに、その死の苦痛から本能的な自慰のために土屋との別れを考える。又、實家の父のきびしい道德觀念にめいわくをかけないように、土屋と別れを決心する。その後、彼女はその人宛に手紙を書いたが送らずに引き裂いてしまった。この小說の內容は姦通小說であり、約1年半の間、夫に知られないように不倫をして明かされなかった完全犯罪を作ったというのが、この作品のすじである。ところで、筆者はこの作品のテーマである「姦通」は間違いないが、その姦通がなぜ美德になることができたのかということが、多少理解できない女の主人公の姦通の中の「美德」のイメージについて分析、研究して見ようとした。ところで、この作品の中で現れた「美德」のイメージを分析して、越次倶子氏が次のように言っている。

> 『美德のよろめき』の節子は、姦通には違いないが、「姦通」という言葉の　イメージからは程遠い氣輕な「よろめき」しかしていないと三島は言いたかったのであろう。[5)]

ここで越次倶子氏は「姦通」が「悖德」であるのは確かであるが、そのような輕い「よろめき」すなわち、一瞬の脫線にすぎない、うわきぐらいにみていて、それを「美德」と表そうとした。しかし、越次倶子氏が言ったように悖德を「よろめき」として見たことを美德としてみたが、さらに、秋元潔氏は次のような空想の中での「よろめき」と美德をみていた。　すなわち、秋元潔氏は空想主義から現實主義へ主人公の考えを變えようとしたが、空想主義の王國は少しもゆれず、空想世界が現實よりもっと輝いたと言っている。　だから、空想の中での「よろめき」であり、そのような考えは實際においては、現實から離れた空想上の美德のイメージを含んでいると言っている。

> 「作品表題は、空想主義から　現實主義へ、ヒロイン倉越節子がよろめいたことを意味している。空想の情事が現實の情事になった時、空想の王國は崩壞し彼女

5) 越次倶子, 前揭書, p. 80.

はその支配者ではいられなくなるはずだったが、土屋と深間にはまっていっても空想の王國は微動だにしなかった。(中略) 土屋との情事は、彼女を空想主義者から現實主義者に轉ばせるつまずきの石ではなかった。空想は彼女をよろめかせ、情事の現實へ向わせたのに、その現實は空想よりもみすぼらしく輝きのないものだった。」[6)]

すなわち、作家は自分が心の中で熱望していた空想世界の情事を組み立てようとしたが、それは現實とは全然合わなかった。しかし、作家はそのような熱望を主人公によって、空想世界で行動させて、その悖德を空想上で起きた過ちとして認識させようとして現實では性幻想であり、空想上では「よろめき」ぐらいに思わせ、それを空想上の美德のイメージに表そうとした。 今度は、 道德的な美德のイメージを越次倶子氏の話から、例をあげて見よう。

彼女の決心は、スキャンダルから里の一族を、嫁ぎ先の倉越家を、守るという「美德」からなされたものである。「姦通罪」が存在した時代は、 節子の行爲は、社會的に 制裁され、葬られねばならぬものであったものが、今の世においては、自分から始めた 姦通を, 自分から止めて、それが、兩家族をスキャンダルから守ることになる、「美德」になるとは! 三島は、そう言いたかったのかもしれない。[7)]

このように「姦通」は悖德をしないのが本當に道德であるが、主人公は既に自分の空想から覺めないで愛人と姦通をした。 そのために姦通した本人は自分が社會から非難をうけて當然である。 しかし、このような事は自分と一番近い節子の嫁ぎ先と實家の人々に迷惑をかけたと思った。 そして、どうすることもできない限界的な狀況であるが、主人公はスキャンダルから逃れようと思った。 自分の過ちを懺悔したことを道德的な美德に思った。それで、作家は主人公による「姦通」を自分自身が自覺して、やめて主人公である節子の姑家と實家をスキャンダルから守ったという点を作家は「美德」としてとらえ、道德的な美德のイメージとしてみた。 それでは、この作品の中に現れた內容を通じてこの論文の主題について言うと空想的な「美德」のイメージと道德的な「美德」のイメージに分けて作品を分析してみよう。

Ⅲ. 空想的な美德のイメージ

この作品の中で現れた內容を通してみれば有閑マダムである女主人公の節子は、言葉で表せない空虛な心で「どんなことがあっても決して許さなければならないものである」という風にせいっぱい 「甘味な空想」に一人で醉っていた。

---

6) 秋元 潔, 空想領域の性愛, 七月堂, 1985. 8, p.p. 65-66.
7) 越次倶子, 前揭書, p. 80.

節子は「道德的な戀愛、空想上の戀愛をはじめよう」などと思いはじめる。「いかなることがあらうとも、決して許さなければよいのだ」という口實の下に、「三日間といふもの、ありたけの甘美な空想に醉つて」8)

彼女は嚴しい家庭で育ったので、道德觀念は堅固であったが、空想上の愛については自らも止められなかった。田中美代子氏は主人公である節子の空想上の愛については寬容であったと次のように言っている。

> 節子は堅固な道德觀念を持つてゐたが、空想上の事柄については寬容であつたというほかはない。9)

又，彼叫ま彼女は、土屋と結婚する前に付き合った青年を探して彼女の官能的な肉體を滿足させようとする空想に落ちこんでいた。彼女が好きなのは全てが官能的なところだった。男はあらっぽくない顔とすらっとした體つきであれば良かった。そして，何よりも若さをもっていれば良いのであった。 そして，彼叫彼女は親からの天賦的な「性的魅力」と「官能的な要素」を持って、戀愛感情と好奇心を刺戟させてくれる若い男性を探していた。このような「エロチシズム」は「若き元氣な愛情」を持った男性には好奇心を充分に引き起すことができた。 從って彼女は自分を滿足させることができる若い男性を無意識の中でも探そうと努力した。 又， 時間と場所を問わずに自分がほしい男性を探して空想の中に入って空想の「無害な快樂の中」の時間の中に入りこんで自分一人で孤獨とさびしいエロチシズムの冒險をしようとした。

> 「空想の無害の快樂」に親しんでいた彼女は、土屋と旅行の約束をした後も「空想のみだらなほうへ、果てしれぬ永い午後の無爲の時間のほうへ」戻ろうとする。10)
> 「空想上の王國の女王として君臨した」節子が土屋に初めて旅行を提案して同意を得た時，節子はすでにその人との愛情に深く落ちいって空想の中に沒入していた。
>
> 彼女が空想の王國の女帝として君臨していたからである。土屋との情事場面のくり返しは作品世界の表層をなしているにすぎず、「空想の領域はまだ美德に屬し、現實は悖德」とする彼女の空想至上主義が深層を占めている。11)

節子は、この旅行の初めの日は炎のようにきれいに自分の体をありのまま全て青年に預けたことは墮落の道を歩み初めた彼女にこの時、「なにかと似ている」とい

---

8) 田中美代子, 聖女の午後 『美德のよろめき』論, 中央公論社, 1978, 7. p.245.
9) 田中美代子、聖女の午後 『美德のよるめき』論, 中央公論社, 1978, 7, p.253.
10) 秋元潔, 上揭書, p. 65.
11) 秋元潔, 上揭書, p. 65.

ったら、「聖なる聖女と似ているだろう」という空想したものである。

その晩の節子は實際火のやうに清淨で、彼女自身、ほとんど肉感的な印象をとどめてゐなかった。(中略) この青年に身を委したといふ自分の精神的姿勢だけで滿ち足りてゐたのである。節子はこのとき、何に似てゐたと云つて、一等、聖女に似てゐただらう。(P.410)

その後、節子はすでに彼との愛情に深くおぼれていることに氣が付くことになった。節子が土屋に會って話して見た結果、土屋は少年のように純潔を守っているということを知った。 節子は同年の獨身青年の土屋を子供のように扱った。 彼は世の事情をよく知らない純粹でいたずら好きの子供のように扱った。それで土屋も子供のように天眞爛漫な行動のみをしようとした。そして節子も天眞爛漫な子供になって罪意識を感じない眞面目な子供になって自分自身のみの空想の中で生きていたかった。

その空想上のエロチシズムは現實でないので，どんな悖德も罪にならないのである。その空想上のエロチシズムというのは現實でないのでどんな悖德も罪にならないためである。 すなわち，節子がしようとしていたのは空想的な戀愛であった。空想の領域はまだ美德に屬し、現實は悖德に屬していた。 このような考え方の結果として、表していた行爲については，峻嚴であるはずの節子であった。そのために、空想上では、彼女は大いに寬大であろうとしていた。 しかし、大部分の女性はそのような心を押えようと努力しているのである。 しかし節子はその空想上の戀愛というのは「美德であるがその行爲が現實に現れた時は悖德に屬する」は空想地上主義者になった節子の心の中では「感情の價値に混亂」が起った。

> 自分が土屋の體に觸れたときの、あのやさしさ、あの自然さ、あの無邪氣さが、かうして節子ををのかすことになつた。節子の內部には、感情の價値の混亂が起つた。(P.405)

それで、その「價値の混亂」を知る前に空想上の快樂を味わう主人公が思う美德のその時間を失ったことが惜しかった。 事實，土屋との肉體の接觸は甘美で、歡喜の喜びは空想上であるので罪にならず、そのような美德を失うことを惜しんだ。 しかし、彼女の現實の世界では ‘果てしれぬ永い午後’の連續であり、「閑な無爲の瞬間」であった。 それでも、夫を思う氣持は持っていたが、實際は夫に對して全然關心がなかった。 彼女の男性觀は男性の野心である事業に對する情熱や、立派な事業家、精神的、知的に優秀なことよりむしろハンサムで性的に女性を滿足させることができる若くて强い男性のみを欲しがっていた。 それで、自分を性的に滿足させない夫に對しては少しも考えようとしなかった。 しかし，この小說は、夫のいる婦人

の姦通小說として常に人の目を意識しながら密かに行われた情事關係の作品として未來に對する不安は言葉で言い表せないぐらいで、もう土屋との戀愛も大變不安に思っていた。 절節節子は土屋に今まで一方的に愛を求めて能動的に對して，土屋は受動的に節子がリードするとおりについていくのであった。

そして、夫である倉越の側から見れば、妻を信賴して自分の事業だけに沒頭をし、家に歸るとねるだけなので、家庭的な問題は起らなかった。 もし、夫が夫人である節子をうたがう事があっても彼女はのりこえる能力と心がまえが身についていた。 又、彼女は空想的な戀愛をしているので夫をおそれなかった。 いよいよ、節子も續いた情事について土屋との關係が不安になってきた。 そして、この小說で節子は空想上のエロチシズムを望んだ。 又、色々な苦痛をがまんしながら、その男との性的交涉をどんなに望んだのか分からない。それで、その男との性的關係があった時はよろこびがあふれるが、ずっと續き、くりかえす欲情は秋元潔氏が指摘したように現實世界では何にもない無想と自分自身をすててしまう苦痛と死だけである。「現實世界の無化と自己消去、受苦と死である」12)

と節子は考えたのである。 その間、節子は夫との間、一度姙娠をした。 彼女はそれを「懲罰の意味」としてうけて，

搔爬手術をしたのである。 このような內容について，秋元潔氏は次のように言っている。

> 作品表題は、空想主義から現實主義へのよろめきを意味しているが、土屋と「最初の接口勿」をした夜、「さびしさから、良人と久々に床を共にした」彼女は姙娠、それを「懲罰の意味」とうけとめ搔爬する(こういう反倫理的倫理偏向はその後も續く)。13)

その後、彼女は土屋とも二度も姙娠した。初めは胎中の赤ん坊をなくそうとして、墮胎手術をした。土屋と二度目の姙娠した時、彼女はだれにも話さないで麻醉もしないで、一人で苦痛をがまんして搔爬手術をうけた。 その姙娠こそが「罪惡の種」で、彼女の數奇な運命を現わしていた。 節子は、自分が空想上の戀愛が實際の現實に現われた時、又、姙娠して搔爬手術を受けた時、胎の中の、その胎兒はまさに、人間の原型であると思った。又、節子から空想上のエロチシズムが、單純な美德であったが、現實に現れた時は姦通になり、その結果、姙娠したのは悖德であった。 その姙娠は、「惡の種」で、搔爬手術により、結局、その「罪惡の種」は除かれる。結局、人間も死んで自然に戾り、悖德による姙娠の胎兒も人間の原型として、そ

---

12) 秋元潔, 上揭書, p. 66.
13) 秋元潔, 上揭書, pp. 66-67.

の原型も骸骨に變わるという意味の佛教の輪廻思想として節子は認識した。その後、彼女は土屋と別れて、彼に送る手紙を書いた。結局、節子は死んで灰になっても土屋との灰と融合して、自然に歸るという空想上の戀愛がしたいという彼女の願いを書いている。すなわち、節子は別れるが深い心の中では土屋に向いている哀切な愛の空想上のエロチシズムがしたいことを表している。

> 節子はこの手紙を出さずに、破って捨てた」という終りかたは、作品世界の現實が無化されるためにあること、土屋との情事はヒロインの性幻想だったことを再確認させる[14)]

と秋元潔氏は言っている。

すなわち、この作品の內容を通じてみれば，節子がみる夢が全部空想上の性愛であり、主人公は一瞬、脫線した　が、浮氣と思って、愛人と別れる女主人公の性幻想を作者は、空想上の美德のイメージで表わそうとした。

Ⅳ. 道德的な美德のイメージ

この小說は、女主人公の節子が不倫をする小說であるが、道德的に、理性的に戀人に會って行動しようと努力している。

また、作者は心理的な方法で想像力を接近させて讀者にそういう心を移轉しようと努力した。

> 『この人相手なら、私の道德的な戀愛は巧く行きさうだわ』 節子のかういふ假定はまちがつてゐた。(P.373)

節子自身のこころの中では土屋がほんとうに自分が選んだ偉い調練師をしたう動物のように思っていた。そして訓練さえうまくすれば言うことをよく聞く手懷けられる動物のように思っていたが、實に調練師は動物を取り扱うことがむずかしかった。

節子は幼い時、禮儀の正しい家門で育ったため、はっきりした道德の觀念を持っていた。しかし、一人で空想上の夢の中では土屋との行動もだれものぞくことができなかったから、どんなはずかしさも感じない彼女の思いにまかせるしかなかった。

> 節子は堅固な道德觀念を持つてゐたが、(中略)　この身美のよい女の羞恥心は、

14) 秋元 潔, 上揭書, p. 73.

> そもそも身美としてしか働らかなかつたので、どんな夢を見ても、恥かしい氣持にはならなかつた。自分ひとりで見る夢を、言佳 に見られる心配があらう!(p.367)

また、彼女が言う美德というのは、外的であることにすぎないし、內的である心のなかの‘すべての色情を抱くものは、すでに心の中に姦淫したものである’というプロテスタントの戒律からはなれて道德的に非難を受けるべきであった。 でも、彼女はまじめなプロテスタントの信者でありながらこのような聖書のことばにも耳を傾けない生活の中で生きていこうとしていた。

> 姦通といふ惡德を犯してもけがれることを知らない優雅な人間(『美德のとろめき』の女主人公)の持つ、眞の意味でぜいたくな魂は、到底文學の上に創造できないといふことだ。[15]

と北原武夫氏はこの作品の女の主人公が世見知らずで道德的なまちがいをおかしているという點を指摘している。 それで彼女は現實でない童心の世界にもどっていきたがっていた。

> 土屋はあきれるくらゐ子供に返つてしまつた。朝日のまばゆさに叫び聲をあげ、マンテルピースのポーカアを持ち出して、猛獸狩りだと云つて節子を追ひまはした。(中略) 私も子供にならなければと節子は思つた。子供になり切りさへすれば、どんな道德的恐怖からも自由になれると考へたのである。(P.411)

節子は空想のなかで子供になって天眞爛漫になってどんな道德的な恐怖からはなれて恐れないようになった。 また、空想のなかで夫があるにもかかわらず土屋との關係を結んでも、幼ないが由に、罪になることさえ知らなかったから、ますます犯罪に落ちることになった。 また、節子はこの青年に自分が妻として、母として縛られている自分の役割を說明しながら自分は社會的な認識のなかで拘束されていることを土屋に言っている。

> 自分が妻として又母として縛られてゐることを、大いに力說しながら、一方、こんな自分の束縛の味方に立つた。獨り者の土屋を子供扱ひにするためには、節子は十分、妻たり母たる自身を、强調する必要をみとめてゐた。(p. 377)

土屋は獨身の青年で愛に對しては自由で節子は息子がある人妻で獨身青年との戀愛に對しては、いつも社會の中で道德的に搏りつけられていて自由がなくて危險だと言った。

---

15) 北原武夫, 小學館,「群像」日本の作家18.三島 由紀夫,『美德のよろめき』1990. 10, p. 144.

> いかに自分が世間を怖がらなければならないかを説明した。(中略) 一軒のレストランの、人目につかぬ一隅に腰を下ろしたとき、彼女はすでに多くの危難をくぐり抜けて來たやうな疲勞を味はつた。(p. 378)

人妻である節子は土屋との關係を土屋だけを相手にすれば道德的な戀愛がうまくいくと思っていた。 また、天眞爛漫な子供にもどって道德的な恐怖から免れようとあがいた。 しかし、結局節子自身は「良心の呵責」を感じるようになる。

いままで節子は空想の中で悖德が實行されていたから自分が不道德的なことをおそくても悟ったら夫に告白するべきであったが、こころの中ではそれをゆるしてなかった。 節子は土屋に教訓的でなければならないし、道德的でなければならなかった。しかし節子はこころの片すみには土屋が自分を輕蔑しているのではないかと恐れていることもあった。 つまり、教訓的な口調でいろいろと言い譯をし、もしすでに土屋の中に動いているかもしれぬ輕蔑の念を拂いのけようとしてみた。

しかし、節子は土屋が非常に道德的な青年であるのに自分を捨てるわけがないと斷定した。 だから、彼女の考えが一度身を許したら捨てられるかもしれないという危惧は、今や全くの取越苦勞にすぎなかったことをはっきりと感じた。 まことに道德的なこの青年は、そんな振舞に出る筈がないと感じた。 今夫が妻である節子自身を疑っても自分は空想上の道德的な戀愛をするために全く關係ないというように道德的な思想だけは脅かすことがなくなったと思った。 そして節子は二回にかけて土屋の子を下ろすこと、しかも耳と眉がない子がなくなるのは善だと感じていた。 このようなことは自分が裏切った美德のつぐないを受けるという一つの業報として思った。

> こんな高貴な考へを抱きながら、一方、一向分析してみない道德觀の裡で、彼女が今度の明らかに「不義の子」を下ろすことを善だと感じてゐたことは、言つて置かなくてはならぬ。(p. 441)

それで節子は戀愛が自由であり、自分の意志のとおりになるためには一瞬間であっても思い出の絆から脫すべきだということを學んだ。また、よく會うことによって墮落しやすくなるし、墮落を怖れる氣になると思った。墮落を防ぐために節子は世のなかを達觀した松木の老人に會って相談をした。

> われわれが未來を怖れるのは、概して過去の推積に照らして怖れるのである。戀が本當に自由になるのは、たとへ一瞬でも思ひ出の絆から脫したときだといふことを節子は學んだ。(中略) 節子が怖れてゐるのは、もう墮落などではなかつた。(p. 460)

道德ということは人間が逃避することができない人間と世界のなかで惡循環を絶

ち切ることができる一回きりの機會を道德だと松木の老人は言っている。 また、明治時代の花柳界の出身でありながら政界の大立物である未亡人になったある夫人がの言った內容は情事のような不道德な事件を世間の人は好む惡いくせを持っている。それでそういう事件がおこらないように自分自身を戒めて注意しなければならない。

> 世間はなるほど情事に寬大ではありません。それといふのも世間がしじゅう不道德な事柄に興味を持ちすぎてゐるからです。そこでさういふ事柄の一つがあらはになると、世間は戶まどひして、自分の面皮を剝がされたやうに思ふのです。(p. 475)

ある日新聞に出た記事で淸廉潔白な人の家庭について事件がばれるとそのひたむきな人は道德的な缺陷に我慢することができなくて自殺した。 もし土屋とのスキャンダルがばれた場合などとか、新聞に出た場合に節子は實家のお父さんにかける迷惑を先に考えるようになったし、そして倉越家にも影響を及ぼすことを豫想した。

> 藤井家の平和な、明るい、道德的な一族, のりを超えようともせず、慾望に煩はされもしない一族, 退屈に苦しめられない心, 不まじめな事に身を賭けたりしない堅實さ、さういふものは又節子のものであつた筈だ。(p. 495)

節子は道德的な藤井の實家と嫁ぎ先である倉越家のために、また退屈に苦しめられない心と道德的な面においてももう土屋と別れる決心をするようになった。 それでこの作品のなかでは夫に知られないように姦通をした不道德な女主人公の節子はなにもなかったように自ら誤りを悟って再び自分本來の家庭主婦にもどっていく。一般的に姦通をした時、本人が自覺しなければ家庭が破綻したり不運に終わる場合がふつうである。 しかしこの作品のなかでは夫が夫人の脫線をしらない間に、再び家庭にもどってきて、愛人と姦通をするまえのように、何事もなかったように行動する。 このように作品の內容は終わったが、ここで筆者は道德的な美德のイメージを現わすことに對して說明しようと思う。 それで、冒頭でのべたように三島は1954年(昭和29年)の夏のある日、舞臺の後で着物を着た19歲の赤坂の有名な料亭の女良とあう。 それで有澤裕紀子の論文で指摘したようにこの作品のなかの女性に影響をうけたと言っている。 ここで有澤裕紀子氏の話しによると次のように言っている。

> 三島はこの女性と三年間もつき合っていたということから、かなりこの戀愛から受けた影響は大きかったと考えていいだろう。 (中略) 三島自身,長編創作において<或る時點における私の內的欲求>がある程度投射されたものだ、と述べているのだから。[16]

---

16) 有澤裕紀子,『永すぎた春』論, p. 96.

このようにこの作品のなかにも三島の內的欲求がある程度透寫れたことたと言っているように、三島がこの作品のなかに表現したい欲求が挿入されたことを現わしている。 すなわち、この作品のなかで主人公の節子が愛人と姦通をしてから家庭にもどってくることは、勿論良心的な面でみると非道德的であるが、社會的な面と家庭的な面からみると、道德的な行動をしたと作家は思っている。 もちろん、日本での姦通罪は親告罪として1947年(昭和22年)に男女平等の法律に違反したといって新憲法では廢止された。 それで姦通罪は日本で法的に罪にならない。 だから彼女が不可避的で限界的な狀況であったから道德的に自分の誤りを悟って悔改して反省した。 しかし、道德的な藤井の實家と嫁ぎ先の倉越の家族のために自ら家庭に再びもどってくるという事實はこの小說が社會的で、家庭的であるという面からみて道德的で美德のイメージで作者は表わそうとした。

Ⅴ. むすび

この作品の『美德のよろめき』はいわゆる姦通小說であり、最近の表現でいうと不倫小說といえる。日本で1947年(昭和22年)に姦通罪が廢止される前までは倫理的にも道德的にも反する小說だということができる。この小說が發表された1957年(昭和32年)までも日本社會では姦通罪は社會的に道德的に大きな罪として認識されていた。このように主婦が姦通をかるい浮氣にしか思わない認識を日本では姦通罪が廢止された1947年以後には罪にならなかったから倫理、道德的にかるくあつかおうとする傾向を作家は意識的に誤りだというのを告發しようとした。この小說の內容構成は越次俱子氏が指摘したように、作家の三島自身のできなかった青春時代の戀愛感情を挿入しようとしなかったかという所をのべたい。たとえば、次のように言っている。

> 三島自身の體驗出來なかった青春であり、二十代の後半から三十代の前半になってみて、過去をふり返り、體驗したかった青春であろう。[17]

すなわち、青春時代の三島が20代の後半から30代の前半の時つきあった赤坂の料亭の女良を、この作品のなかで主人公である節子が代りに、自分の心のなかに抱いていたイメージをこの作品のなかで挿入しようとしたと思われる。それで、この作品の女の主人公である節子は姦通を空想的であり、道德的なエロチシズムとしか思わなかったが、その点がまちがっているのを悟らせようとする作家の意圖が隱れて

17) 越次俱子, 前揭書, p.80.

いるといえる。しかし1957年もその當時には日本人の思考に組み込まれている思想はいまも佛教や儒教思想に浸っていたから社會的な側面で意識的に姦通を受けとらなかったし、非常に重い罪に受けとったためにこの小說が發表されると社會的に大きいセンセーションをよびおこした。また、讀者がこの作品を讀んで法を語る前に放縱された性文化と單純な性的な快樂をたのしもうとする姦通がまちがっていることが社會的に一致した考えであり、日本女性の通念であることが感じとれる。この作品で主人公の節子は性行爲を人間のいちばん美しい感情の表現方法として感じることではなくて、快樂に思っていたところが日本人の讀者に大きい衝擊を與えた。しかし節子は意識的に自らの悖德を正當化しようとしたところが誤りであったことを自覺して再び本來の家庭主婦にもどってくる。それでこの作品が「姦通」にはまちがいないが、その姦通した「悖德」がどうして「美德」になるのかというと、一番目は女の主人公が姦通をしたが自分の作った假想の中で空想上での性幻想であって、空想のなかでの「よろめき」くらいであり、瞬間的な脫線程度に考えた点を空想上の「美德」として考えている。また、意識的に主人公自らが空想からの悖德を自覺したという点がこの空想上の美德のイメージだといえる。

二番目は主人公の節子が土屋と別れるスキャンダルで實家の一族と嫁ぎ先である倉越家を守るため愛人と別れるということが冒頭でいったように良心的な面からみると非道德的であるが、社會的、家庭的な側面からみると、道德的な「美德」であると思っている。

このように姦通した事實はたしかに悖德であるが、どうしようもできなかった狀況で實家と嫁ぎ先をスキャンダルから救うという点を作家は美德として考えたし、かれはこの作品のなかで自分が表現したい欲求である道德的な美德のイメージとして表わそうとしたこの二面を結びとして記しておきたい。

(本稿は日本學報第43輯(韓國日本學會 1999. 12.)に發表された論文である.)

參考文獻

佐伯彰一外 3名 編纂,『三島由紀夫 全集』(全 35卷, 補1卷), 新潮社, 1973.
文藝讀本,『三島由紀夫』, 河出書房新社, 1983.
越次俱子, 國文學(第21권16號)「ロマンの世界」, 1976.12
松本徹編著, 『年表作家讀本三島由紀夫』, 河出書房新社, 1990.
秋元潔,『三島由紀夫,《少年》述志, 感傷主義假構と死』七月堂, 1985. 6.
北原武夫,『群像』日本の作家18, 三島由紀夫,『美德のよろめき』, 小學館, 1990.
國文學解釋と鑑賞, 三島由紀夫(第43卷10号), 1978.10

林薫植, 「三島由紀夫의 作品分析」啓明大學校 大學院, 碩士論文, 1982.
三島由紀夫(日本文學研究資料叢書), 有精堂, 1984.
三好行雄編, 三島由紀夫 必携 (No.19) 學燈社, 1983.
磯田光一,「作家と作品」,「日本文學全集 82」, 集英社, 1970.
田中美代子, 聖女の午後「美德の よろめき」論, 中央公論社, 1978, 7.

KOREA MARITIME UNIVERSITY 1945 한국해양대학교

■ 국문초록

『美德のよろめき』의 연구

장 진 수

『美德のよろめき』의 작품은 여주인공 세쓰꼬(節子)가 패덕(悖德)의 공상 속에서 「도덕적인 연애, 공상상의 연애를 시작하자」고하는 불륜 한 공상상의 성애라고 할 수 있다.

필자는 이 작품에서 주인공이 간통을 단순한 쾌락으로 생각하였고, 공상적인 에로티즘 정도로밖에 생각하지 않은 점이 자유가 아닌 방종으로 현실에서 벗어난 공상상의 이미지를 나타내어, 자기의 패덕을 정당화하려고 한 것으로밖에 볼 수 없었다.

그러나 주인공이 얼마 후 의식적으로 자기 스스로 이 패덕을 자각하여 다시 가정주부로 되돌아온다.

이것은 작가 三島由紀夫가 이 작품 속에서 여성의 사회상의 문제를 심리적인 면을 통하여 고발하려는 점이고 또 이 작품이 과연 도덕적인 에로티즘 정도로밖에 되지 않는가 하는 사회상의 문제점을 고발하려는 점이었다.

그래서 의식적으로 주인공 스스로 공상으로부터의 패덕을 자각하고 현실속에서는 성환상이었다는 점이 이 공상적인 미덕(美德)의 이미지라고 생각하였다. 이와 같이 작가 三島由紀夫가 쓴 이작품의 주인공 세쓰꼬는 간통을하고 다시 가정으로 돌아온다. 그와 같은 양심적인 면에서 보면 비도덕적이지만 사회적이고 가정적인 측면에서 보면 도덕적인 행동을 하였다고 생각하고 작가는 사회적으로 바르고 도덕적인 방향의 길을 제시하였다는 점이 도덕적인 미덕(美德)의 이미지를 나타냈다고 하는 것이 이 논문의 결론이라고 할 수 있다.

KOREA MARITIME UNIVERSITY
1945
한국해양대학교